# 津（つ）市

産業
津市

## 布引（ぬのびき）山地と風力発電施設

布引山地は三重県の中央部に位置し、伊勢平野と上野盆地の境になっていて、生活・文化面においても伊勢地方と伊賀地方を分ける境になっています。山頂にある青山高原からは、伊勢湾全体や対岸の愛知県の知多半島まで見わたすことができます。

この高原には、発電量国内最大規模の風車が32基設置されています。1基当たりの発電能力は750kWで、合計24000kWの電力をクリーンエネルギーとして発電しています。風車は、タワーの高さが50m、ローター（回転部）の直径が50.5m、地上から最頂部までの高さが75mと、大きさも国内最大級の風車です。

現在19基が建設中で、今後さらに増やしていく計画もあります。風力発電は、クリーンエネルギーとして注目されていますが、環境、景観などへの影響について指摘する声もあります。

風力発電施設（津市政策財務部広報室提供）

【→P110＊1】

- 現在、各地で風力などのさまざまなエネルギーを利用する取組が進められています。どのような取組が進められているか調べてみましょう。

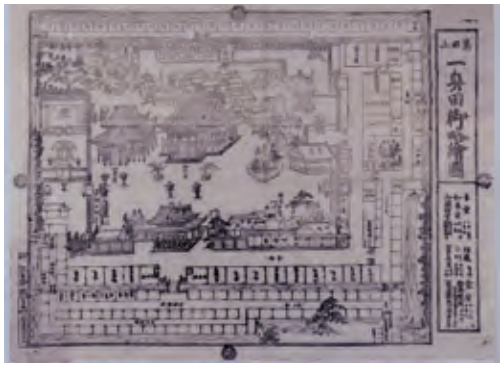
文化財
津市

# 専修寺と一身田寺内町

専修寺は津市一身田町にあり、浄土真宗の一つの派である高田派の本山です。室町時代の15世紀の末に、真慧が布教のため、寺を建てたことが始まりです。国宝に指定されている浄土真宗の開祖親鸞の直筆の文書など、数多くの文化財を所蔵しています。境内には山門、唐門、御影堂、如来堂などが建ち並んでいます。中でも御影堂は、間口42.73m、奥行33.5m、内部の畳が725畳の広さがあり、重要文化財の建造物では全国でも5番目に大きな建物です。

如来堂と御影堂（津市教育委員会提供）

専修寺のまわりは、南北が450m、東西が500mの堀と川で囲まれた寺内町となっています。町内には専修寺を中心にして寺院や商店、住宅などが建ち並び、江戸時代には入口は3か所で、橋と門があり、午後6時から午前6時までは閉められて、夜間は町内に入ることはできませんでした。すぐ近くを東海道の関宿【→P31】と津とを結ぶ伊勢別街道【→P99】が通り、町内には伊勢や京都への道しるべが残っています。


一身田御略絵図（1760年ごろ）
（真宗高田派専修寺所蔵）

【→P111＊38】

▪ あなたが住むまちの近くに、歴史的に特徴のある町がないか調べてみましょう。

史跡
津市

# 北畠氏城館跡

南北朝時代に伊勢国に入った北畠氏は、玉丸（玉城町）を拠点として南朝を支え、後に多気（津市美杉町）に本拠を移し戦国大名へと成長していきました。多気には戦国大名北畠氏の名残として、霧山城跡、館跡、庭園が残っています。

霧山城跡は、標高約560mの霧山の山頂にあり、南北2つのブロックに分かれています。霧山城跡から南東へおよそ1km、霧山の麓に北畠氏館跡があります。山頂との標高差は約240mで、現在は北畠神社の境内になっていて、その南部には北畠氏館跡庭園があります。

庭園は面積が約2800㎡あり、枯山水のある築山と石組・池とを巧みに配置した名園といわれています。この庭園は、1936（昭和11）年に国の名勝及び史跡に、霧山城跡も1946（昭和21）年に国史跡に指定されましたが、2006（平成18）年には「多気北畠氏城館跡」として二つを統合のうえ追加指定されました。北畠氏がこれらの地を拠点として戦国時代をどう生き抜こうとしたか、興味がわくところです。【→P49、55】

北畠氏館跡庭園（津市教育委員会提供）

【→P110＊23、P111＊57】

▪ 近年の発掘調査で館跡や庭園についてわかってきたことを調べてみましょう。

人物 津市

# 藤堂高虎

藤堂高虎は1556（弘治2）年、近江国犬上郡藤堂村（滋賀県犬上郡甲良町在士）に生まれました。高虎は1570（元亀元）年、近江の戦国大名浅井長政軍の一員として姉川（滋賀県浅井町）の戦いで織田信長・徳川家康の軍と戦ったのを皮切りに、何度か主君を変えながら多くの合戦に参加しました。特に、豊臣秀吉の弟秀長の下では、中国・四国・九州を転戦し、さらに相模国（神奈川県）の北条氏攻めに加わりました。その間、本能寺の変後の山崎の戦い、賤ケ岳の戦い、小牧・長久手の戦いにも参加し、全国統一の時代を秀長軍の武将として戦い抜きました。秀長とその子秀保が死去すると秀吉に従い、文禄・慶長の役にも従軍しました。秀長に仕えた当初300石であった領地は、度々の戦功によって次第に加増され、1598（慶長3）年には8万石になっていました。

1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いでは徳川家康の東軍に属し、戦後、伊予国（愛媛県）今治に20万石を与えられました。伊賀・伊勢に移ったのは1608（慶長13）年のことで、津と伊賀上野に居城を持ち、領地は最終的には32万4000石になりました。

高虎は城の建築にも優れていました。高虎が建築や修理を手がけたものとして、徳川家康の京都邸、伊予宇和島城、近江膳所城、京都伏見城、江戸城、丹波（京都府）篠山城、丹波（京都府）亀山城、大坂城、天皇の御所、日光東照宮などがあります。

津城と伊賀上野城の修築に着手したのは1611（慶長16）年のことで、津城では、本丸や櫓を増・新築したほか、石垣・堀を拡充、整備しました。同時に、城下に伊勢街道（参宮街道）を通すなどして津の町を整備し、その発展を図りました。

高虎は外様でしたが、家康の信任が厚く、津・上野への転封は大坂城の豊臣氏を監視させる目的があったといわれています。また、1611年には京都二条城で、家康と豊臣秀頼の会見の接待役を務めているほか、2代将軍秀忠の娘和子を後水尾天皇に嫁がせることにも尽力しました。晩年には、ほとんど視力を失った状態で江戸城での夜話会に出席する際、3代将軍家光から駕籠に乗ったまま城内に入ることを許可されたといわれています。

高虎は、1630（寛永7）年、75歳で死去し、江戸の上野寒松院に葬られました。墓碑は津の寒松院と伊賀市上野の上行寺にもあります。また、日光東照宮にも墓碑があり、家康と高虎の関係の深さがうかがわれます。

高虎の霊を合祀する八幡神社の祭礼として、2代藩主高次によって始められたのが津祭です。城下の各町が行った出し物の一つに、県の無形民俗文化財に指定されている分部町の唐人踊りがあります。朝鮮通信使をまねたものといわれ、現在も保存会の人々によって受け継がれています。【→P28】

重要文化財藤堂高虎像（四天王寺提供）

【→P110＊12、＊21、P111＊42、＊46】

▪ 戦国武将としての高虎、近世大名としての高虎の生涯を詳しく調べてみましょう。

伝説 津市

# 阿漕平治

平治という漁師が、伊勢神宮に供える魚しかとってはいけない阿漕浦で、夜な夜な薬効のある「やがら」という魚をとって母の病気を治そうとしていました。しかし、何度か繰り返すうちに、平治と印のついた笠を浜辺に置き忘れたことから密漁が発覚し、捕えられて簀巻きにされ、阿漕浦の沖深く沈められました。人々はその霊を慰めるために阿漕塚を建て、盆踊りを行うようになりました。これは、現在伝わっている孝行息子である平治の伝承のあらましです。津市柳山平治町の阿漕塚へ行くと、この伝承の説明や資料を見ることができます。

この伝承は、江戸時代につくられた古浄瑠璃や義太夫の作品がもとになっていますが、その作者たちは室町時代につくられた謡曲『阿漕』にヒントを得たものと考えられます。『阿漕』では漁師の名が平治ではなく阿漕であるほか、やがら・母の病気・笠などは出てこず、密漁の理由も、どうしても魚をとりたかったらしいとしかわかりません。そして、魚をとるという殺生と密漁の二重の罪に苦しむ阿漕の霊が旅の僧の前に現れ、供養されることを望んで波の底に沈んでいくところが話の中心になっています。

阿漕塚（津市教育委員会提供）

【→P110＊2】

▪『阿漕』は平安時代に詠まれた和歌をヒントにつくられました。伝承のルーツを探ってみましょう。

人物 津市

# 谷川士清

谷川士清（1709～1776）は江戸時代中期の国学者で、同じ国学者で松阪出身の本居宣長【→P38】より20歳年上にあたります。「恒徳堂」とよばれた医院の長男として生まれ、医者のかたわら「洞津谷川塾」や「森蔭社」とよばれた塾や道場を開いて門人に学問を教えました。【→P21】

谷川士清
（津市教育委員会提供）

彼の研究の一つに『日本書紀』の研究があり、注釈書である『日本書紀通証』を著しました。その第1巻の付録に『倭語通音』といわれる動詞の活用表を著しています。また多くの書物の研究を続ける中で、言葉を50音順に整理し、日本初の本格的な国語辞典である『和訓栞』全93巻を編集しました。方言や外来語まで含むほど語彙が多く、出典や用例も多く載せられ、現代の国語辞典のもとになった本でした。

和訓栞、自筆稿文
（石水博物館提供）

旧宅と墓が国の史跡に指定されていて、旧宅は津と伊賀上野を結ぶ伊賀街道沿いの八町にあり、当時は街道沿いに商店が建ち並んでいました。1775（安永4）年銘の瓦が残っていて、その頃建て直されたか、新築されたものと思われます。

【→P111＊44】

▪あなたの住むまちで歴史上重要な業績を残した人について調べてみましょう。

歴史 津市

# 三重海軍航空隊

平成の大合併によって津市となった香良洲町は、雲出川と雲出古川にはさまれた三角州です。面積は約4㎢ですが、形が分かりやすく、三角州の例として全国版の書物にも掲載されています。その香良洲町の約1/3を使って、第二次世界大戦中に三重海軍航空隊が置かれていました。飛行機を使った訓練に至るまでの基礎学習を行う海軍飛行予科練習生（予科練）のための航空隊で、土浦海軍航空隊（茨城県）に次いで、1942（昭和17）年8月に開隊しました。前年に太平洋戦争が始まり、海軍航空兵力を増強させるために設置されましたが、開隊の2か月前のミッドウェー海戦の敗北を受けて、短期間での訓練実施が期待されました。

練習生たちは、夏は5時、冬は6時に起床して、航海・航空術、通信、砲術などの訓練や、国語・漢文・地理・歴史などの学習を繰り返しました。のべ約30000人の若者が在隊し、戦地へ赴いていきました。この航空隊は、終戦とともに解隊となりました。現在、津市香良洲歴史資料館（若桜福祉会館）には、戦争の犠牲となった予科練習生たちの遺影・遺品・遺書などが展示され、彼らを顕彰する碑が建てられています。

予科練の夏の制服（左）と冬の制服（右）
（香良洲歴史資料館所蔵）

【→P110＊20】

▪ あなたの住む地域にも戦争について知る手がかりがないか調べてみましょう。

産業 津市

# 伊勢湾のこうなご漁

伊勢湾は三重県の東側、対岸の愛知県との間にあり、面積約1700㎢、東西約30km、南北約60kmの湾です。沿岸は砂浜海岸が続いていて、カタクチイワシをはじめ、カレイ、キス、コチ、サバ、シャコ、バカガイ、トリガイ、アサリなどがとれます。

こうなご漁（津市水産振興室提供）

春になると、津市の香良洲から白塚、河芸にかけての海岸では、コウナゴ漁が始まります。コウナゴは「小女子」と書き、イカナゴの別名で、体長3cm～5cmの稚魚・幼魚を主な漁獲対象としています。伊勢湾のコウナゴはふっくらと丸みがあり、脂ののりがよいのが特徴で、浜の沖合で2隻の船で網を引く船引き網漁法でとり、運搬船で港に運びます。一時期、乱獲などで減少が心配されましたが、愛知県側と三重県側で協力して一定量の親魚を残し、翌年の産卵量を確保するといった資源管理に取り組み、漁期は2月下旬～4月中旬で、毎年話し合いにより決められます。漁獲量は年によって差がありますが、2006（平成18）年は12018tで、全国第3位でした。三重県の「バイオトレジャー発見事業」の素材部門に選定されていて、地域の中で特徴をもった農林水産資源として注目されています。

とれたてのコウナゴ
（津市水産振興室提供）

＊バイオトレジャー：三重県にある地域固有の卓越した農林水産資源（素材、商品、技術、仕組み等）を指す三重県独自の造語

▪「バイオトレジャー発見事業」に選定されているなど、地域の特徴を生かした産業が近くにないか調べてみましょう。